

令和 6 年 9 月 26 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00778

研究課題名(和文) 東アフリカろう者コミュニティの動態研究 祖型手話の記述を通してー

研究課題名(英文) A dynamic study of Deaf communities in East Africa through an investigation of the Proto sign language

研究代表者

宮本 律子 (Miyamoto, Ritsuko)

秋田大学・国際資源学研究科・教授

研究者番号：30200215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ケニア、ウガンダ、タンザニアにおいて、東アフリカプロト手話と呼べるような祖型がありそれが伝播していった可能性があるのかを記述することであった。次のようなことが明らかになった。

1. 東アフリカの手話のたどってきた歴史は、西アフリカ手話のたどってきた歴史はかなり異なり、西はフォスターの学校、東はケニアのキスムのニャンゴマ(Nyang'oma)ろう学校を中心としたもので、タンザニアではフィンランド手話の影響が見られる。2. 西アフリカとは異なり、東の手話は各国の古手話(基層)の上に外来手話が乗って混成されたようであるが、外来手話の影響がウガンダとタンザニアではかなり異なる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アフリカの手話と一口に言っても西アフリカと東アフリカでは、状況は大きく異なり、東アフリカの手話の基層はより複雑(複数の基層からなる)であることが明らかになった。日本のような島国とは異なり、人の移動が容易なアフリカ大陸で、手話の伝播の仕方と遠く旧宗主国の手話からの影響は、それぞれの国の手話の形成にどう影響しているのかという点においては、日本・韓国・台湾では、教員の移動が主因、アフリカ大陸では生徒の移動が主因で、加えて旧宗主国・支援ホスト国も単一ではなく、時代と共に変わってきた経緯も反映していると考えられる。以上のようにアフリカの手話の動態が明らかになり社会言語学分野に寄与することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to explore the possibility that what can be called East African Proto-sign Language was spread through migration and education in Kenya, Uganda, and Tanzania. The purpose was to describe in detail what was happening. The following was revealed.

1. The history of sign language in East Africa is quite different from the history of sign language in West Africa, centered around Foster's School in the West, the Nyang'oma School for the Deaf in Kisumu, Kenya in the East. The influence of Finnish Sign Language can be seen in Tanzania. 2. Unlike in West Africa, sign languages in the East seem to have been blended with foreign sign languages on top of the ancient sign languages (base layers) of each country, but the influence of foreign sign languages is quite different in Uganda and Tanzania.

研究分野：アフリカ言語学

キーワード：手話 東アフリカ 言語動態 祖型 言語接触 ろうコミュニティ

1. 研究開始当初の背景

ケニア、ウガンダ、タンザニアにおける音声言語の研究は多数ある。一方、視覚言語、手話に関しては、ろう教育を担った学校についての記述や、ろう団体が主体となった語彙集の事例はあるものの、その実態は、未だ明らかではない。世界の多くの途上国同様、この地域においてもアメリカ手話(ASL)の影響は強く残っており、ウガンダ手話やケニア手話では、かつてこれらの国々の手話は ASL であると思われていた時期もあった (US Peace Corp, 2004)。しかし、ケニア手話に関する我々の調査 (森, 宮本, Kakiri, 2010, 2011, 2015 Miyamoto & Mori 2015) からケニア手話については、ASL とは別種の手話であることが証明されつつあり、ウガンダ手話についても本研究の研究協力者による研究が始まっている (Lutalo-Kiingi, 2012)。

個々の手話言語について記述が進みつつある一方で、ここでむしろ注目しなければならないのは、これらの地域の手話が互いに異なっているが、似ている側面も持つという事実である。数詞などでは大きな違いがあるが、基礎語彙の一部では似通った表現があり、それは ASL とも異なっていることがわかっている ()。このことは、東アフリカプロト手話とでも呼べるような祖型が過去にあり、それがろう者たちの移動や教育によって伝播していった可能性を示唆している。実際に、現地における過去の聞き取り調査においても (宮本代表科研「東アフリカろう文化形成におけるケニアのセカンダリースクールが果たす役割の研究」)、ろう児童のための中等教育がタンザニアやウガンダで整備されていなかった 1980 年代まで、一部のろう者がケニアで中等教育を受け帰国後、言語面での影響をもたらした可能性が高い。言語接触および言語変容の興味深い事例と言える。従って、本研究は、個別手話言語の記述研究に寄与するばかりでなく、社会言語学のフレームワークに手話言語学の成果を取り入れることができ、さらに音声言語における同様の研究との対比で言語の持つ複雑さの解明に寄与できるものと確信する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東アフリカの手話 (ケニア、ウガンダ、タンザニア) をフィールドに、同地域内のろう者コミュニティにおける言語接触現象に注目し、東アフリカプロト手話と呼べるような祖型がろう者たちの移動や教育によって伝播していった可能性を探ることにより、手話言語同士の接触で何が起きているかを詳しく記述することであった。

さらに、それが従来の社会言語学 研究および言語類型論のフレームワークにどのように寄与できるかを探求することであった。

3. 研究の方法

新型コロナウイルスの世界的な蔓延及びその後の調査地でのエボラウィルスの発生等により、ウガンダ現地への渡航は、新型コロナウイルス発生前の 2019 年及び世界的な流行が落ち着いた 2023 年の二回のみにとどまった。最初の渡航時には、調査の準備も兼ねた予備的調査として、現地で一週間ほどの手話言語学ワークショップをウガンダを開催していくつかの議論を行った。二度目の最後の渡航時にも同じメンバーに集まってもらいワークショップを開催して、主目的である東アフリカの手話についてどの程度、各国の語彙が似通っているのかについて議論してデータを収集した。歴史的な経緯もあるため関係の深いケニア手話とウガンダ手話の比較がメインであったが、これに加えて他の東アフリカ圏に属するブルンジ手話やタンザニア手話などについても情報を収集した。タンザニアでの調査もコロナ禍前の 2019 年の予備調査、2022 年、2023 年の情報収集の計 3 回行った。ウガンダ同様にワークショップを実施し、タンザニア手話の情報を収集、整理した。

4. 研究成果

日本では西アフリカについては、亀井の研究によりフランス語圏アフリカ手話 (LSAF) の伝播経路とその広がりが知られているが、東アフリカについては、この同様の A. Foster のネットワーク以外の情報はあまり知られていなかったが、より詳細な情報が分かった。まずウガンダ手話、次にタンザニア手話についてそのろう教育の歴史と手話との関わりについて以下、報告する。

(1) ウガンダ

1961 年の同国初のろう学校の設立 (中学部まで) によって、ろう教育で手話が用いられるようになった。当初導入されたのはイギリス手話 (BSL) で、ろう学校の教師として当時の宗主国イギリス出身者が採用されたためである。記録によれば、1987 年にはイギリスからの聴者キリスト教宣教師ボランティアが Ntinda (カンパラ) のろう学校に派遣されたという (Akoth 2021)。ウガンダの手話も彼らは少し学んだものの、教育自体は BSL に基づいて行われていた (Wallin et al., 2006: 25)。このこともあり、ウガンダでは当初、指文字は BSL 式の両手を使うものが用いられていた。

1980 年代に入って、米国でアメリカ手話 (ASL) を学んだろう者がナイジェリアを経て、帰国し、ろう学校で教え始めたが、このことが、ASL が UgSL よりも上等な言語として受け入れられるという事態を引き起こしている (Nyst, 1999: 17)。これにより、BSL と古 UgSL とが使われていた土壌で ASL がそれを上塗りする強力な言語として存在するに至った (Nyst & Baker, 2003: 71

in Lutalo-Kiingi, 2008)。

1995 年になると UgSL はウガンダ憲法で公認され、UgSL の普及に弾みがついた。しかし、こうした公用語化にも係わらず、手話使用者への支援は拡大せず、2006 年に全国デモが UNAD 主導で実施された。以後、実効ある手話に係わる言語政策が同国でも徐々に広がってきたと言われている (Olwoch, 2006: 2 in Lutalo-Kiingi, 2007:19)。

既に述べたように同国内に設立されよう学校は、前期中等教育までであったために、卒業後、日本で言う高等部にさらに進学して学びたい生徒は、ウガンダを出て、ケニアのろう学校に入学せざるをえなかった時代が近年まで長く続いた。このケニアでの後期中等教育という環境は、同国における ASL の位置づけに大きく関係している。

つまりろう教育への ASL の導入により、80 年代に中等教育の第 4 学年以後、教室内での指文字は BSL 式から ASL 式に移行していった。同時に米国からの教員ボランティアの受け入れも拡大しており、2015 年頃のろう学校の Director 職にあった Joseph Morrissey 氏 (白人米国人) が、そうした ASL 化を推進した。すなわち、ASL のろう教育への導入 ASL の上級言語としての認識 ケニアというウガンダよりも ASL の影響の強い地域での後期中等教育といった三つの要因が、ウガンダ手話における ASL の影響力拡大の背景にあった。また米国のギャローデット大学に留学した最初のウガンダ人ろう者 Maurice Ssenyonga が活躍したのが 60-70 年代であったことも特記されて良いかもしれない。しかし、同氏以後、ギャローデット大学に留学したウガンダ人ろう者はひとりのみで、2023 年時点ではひとりもいない。従って、ウガンダにおいては、ろう者自身の米国留学組による ASL の UgSL への影響というのは限定的と考えられる。つまり、西アフリカの LSAF と比すると東アフリカの手話の ASL との距離は国ごとにだいぶ異なり、ケニアは近いがウガンダはより遠いということが分かる。

2023 年 7 月末にウガンダの首都カンパラにおいて、1 週間のワークショップがウガンダ各地出身のろう研究協力者 6 人の参加を得て実施した。同ワークショップにおいて UgSL と KSL を比較調査した結果、調査した 210 語中、90 語で手話が共通していると認められ、120 語で異なりが見られた。異なりが見られた手話のうち、品詞別では動詞 7、名詞が 23、形容詞が 5 だった (それ以外もあるため、合計は 120 にならない)。また他国の手話と一致したものでは、KSL との異なりが 49、ルワンダ手話 0、タンザニア手話 3、東アフリカ全域 9 で、90 語の一致と比べるとウガンダ手話だけが異なる度合いは、どちらかというとも異なり、東アフリカの各国の手話との相似が目立った。また異なる音韻パラメーターについては、手型が 51、位置が 29、動きが 57 となっている。手型と動きの違いが特に目立つ形となっている。

これまで述べてきたようにウガンダ手話では、西アフリカの LSFA とは異なり、古 UgSL の基層の上に BSL がまず乗り、さらにそこに ASL が乗っていったが、ASL からの影響の仕方は、隣国 KSL からの影響もあるなどより複雑である。一方、KSL と UgSL の間には強い相似関係はあるが、それでも全く同じではなく、系統的にも異なる語彙もある。

(2) タンザニア

他の東アフリカ諸国と同様、タンザニアでも初期のろう教育は宣教師による活動が中心であった。1963 年、オランダのカトリック教会によってタボラ (Tabora) に初等ろう学校が設立される。口話法の教育(手話は禁止)が実施された。1974 年、ダルエスサラームに Tanzanian Society for the Deaf と教育省との連携により Buguruni School for the Deaf が設立された。1981 年、ルーテル教会(Lutheran Church)により、Bukoba School for the Deaf(Kagera) と Mugeza and Mwanga School for the Deaf(Kilimanjaro)が設立された。これらはスウェーデンとデンマークの宣教師たちの活動から始まったという。2010 年タンザニア政府がインクルーシブ教育を導入した後は、特別教育のユニット(特別支援学級)がなくなり、障害児教育の組織が見えにくくなっている。現在はろう学校 14 校(初等 12・中等 2)。その他 25 のインクルーシブ教育を行う学校がある。

タンザニア手話の背景でケニアやウガンダと異なる点としては、スカンジナビア諸国の手話の影響がある。ろう学校創設が始まった頃にフィンランドをはじめとするスカンジナビア諸国の支援団体 NGO がタンザニアに多く入った。その理由は 2 つある。一つは、1960 年代～1980 年代後半にかけて社会主義国だったので、英国、アメリカ合衆国等の団体が入りにくかった。親米路線をとった隣国ケニアとも鋭く対立していたことがある。もう一つの理由は、ニエレレの、家族を中心とした伝統的なアフリカの社会主義に立脚し、争いのない平等な社会の実現に向けて集住化・集団農場の経営、スワヒリ語による初等・成人教育を徹底するといった考え方に共感する団体がスカンジナビア諸国の NGO に多かったのである。1970 年代～80 年代には 50 ものスカンジナビアの宣教団体がタンガニーカに存在したという(Tcherneshoff (2019), pp.41 - 42)。

タンザニアにはろう学校を中心とする 7 地域に手話の変種があり、語彙は若干異なるがお互いに理解は可能である。ただし、フィンランドの宣教師が設立したろう学校を中心とした Arusha-Moshi 地域の変種はフィンランド手話を基盤とした特殊なものであると言われている。また、ライデン大学の Eugen Phillip によると、最初のろう学校が設立された Tabora の方言は他の変種とかなり異なるというがいまだにその詳細は明らかになっていない。比較的長い間、これらの変種間の交流が少なかったことから、変種間の異なりが意識され、このことがろう教育の障害になっているとされてきた。1980 年代以降、障害者の人権運動の高まりとともに、ろう教育の充実および全国統一手話の必要性が提唱され、その一環として 1994 年に Tanzanian Sign Language Dictionary の第 1 版が、2004 年には第 2 版が出版された。タンザニアろう協会

(CHAVITA) が 1984 年に正式な団体となり、その活動の中心として TSL (タンザニア手話) の標準化を目指すことになった。UDSM (ダルエスサラーム大学) の言語学科の Prof. Muzale を中心に、ワークショップが開催され、全国の 7 つの地域からそれぞれ複数のろう者が参加し、出来るだけ特定の変種に偏らないよう共通する単語として合意できる単語を選んだという (Muzale, 2004, pp.vi-vii)。タンザニア手話辞書第一版が 1994 年に出版された (単語数 900, 手書きの絵による説明)。その後改訂され 2004 年に第 2 版 (単語数 2500, 写真による説明, スワヒリ語による見出し, 英語の index 付)。この辞書は、ろう学校教員の養成で活用や通訳養成 (後述) で使用されることが期待された。その後、第 3 版の編集が 2020 年に終了し、デジタル化されることになっているが、2024 年 4 月現在未公開である。当初の計画では、ろう学校の生徒にタブレットを配布して辞書を学校で使用する予定だったが、タブレットを購入する予算がないので進んでいないという (宮本聞き取り 2022 年 8 月)。さらに、ろう生徒が中等学校で学ぶためのガイドラインとはすでに開発され、政府に提出済みで、教科書とシラバスは作成中という (Mkama 2021)。また、大学での通訳の養成もはじまっている。2015 年、タンザニアろう者協会 CHAVITA とダルエスサラーム大学 (UDSM) との共同で UDSM 内に、タンザニア手話通訳養成プログラムが開始されたのである。前述の辞書編纂の時に統一された TSL を用いて教育を行う。経費は Deaf Child Worldwide (英国の NPO) による支援、academic な単位認定は UDSM で、3 年間の期限付き (2018 年終了予定, 1 年延長して 2019 年終了) であった。これまで 38 名の修了者 (手話通訳の certificate) あり、有資格の通訳者が続々と社会に出ている。外部資金の修了で 2018 年以降のプログラム存続が危ぶまれたが、その後、大学のカリキュラムの一部となり継続している。ただし、手話研究の中心であったダルエスサラーム大 UDSM の Muzale 教授の退職に伴い、指導する教員が不足しているという (宮本聞き取り 2019 年 9 月聞き取り)。

このような現状で、TSL の共通語 (統一手話) がどの程度普及・定着しているかを知るには大規模な調査が必要であり、さらに 7 変種それぞれを詳しく調べることができなかったため、本研究では、様々な変種に長く接触してきたベテランの通訳者と統一手話編纂に関わったろう者の協力を得て、どの変種においても理解され使用される「共通の手話」を記録し、基礎語彙分析した。その結果、フィンランド手話 (FSL) との共通性は 30% 程度であり、KSL との語彙の共通性は 10% 程度であることがわかった。TSL を第一言語とするろう者の言語的直観によると、KSL は「語彙が全く異なる」「早くて読み取れない」という印象があり、FSL は「外来の手話」という異質性を強く感じるという。Tcherneshoff によると、フィンランド手話 FSL とタンザニア手話 TSL の基礎語彙 973 語を比較すると、全く同じ identical 15.4%, 似ている similar 27.3% で、計 43% が同じか近いことから、フィンランド手話からの影響が強いと結論付けている。ここで考えられるのは、複数変種に共通する基盤 TSL の上に外来手話である FSL の語彙が乗っている状態である。一方、KSL と比較すると、TSL においては ASL の影響はほとんどないと言ってよい。ケニアでは、アメリカで高等教育を受けて帰国し、ろう教育における手話使用に大きな影響をもたらした Michael M. Ndurumo が ASL の単語をろう教育に取り込んだことにより、ASL の KSL への影響が多にあるが、タンザニアにおいてはそのような事象が起こらなかった。また、ウガンダと同様、タンザニ国内に設立されたろう学校は、前期中等教育までであったために、卒業後、高等部まで進学して学びたい生徒は、ケニアのろう学校に進学せざるをえなかった時代が近年まで長く続いた。しかしながら、それは経済的に大変困難でケニアの学校で学びタンザニアに帰国したろう者はごく限られており、TSL にもたらした影響はほとんどなかった。近年になって、ケニアで実施されるキリスト教の聖書翻訳プロジェクトに参加したろう者が KSL を持ち帰っているがこれも数が限られており TSL への影響はほとんどない。

以上をまとめると次のようになる：

1. アフリカの手話と一口に言っても西アフリカと東アフリカでは、状況は大きく異なり、東アフリカの手話の基層はより複雑 (複数の基層からなる) である。
2. 東アフリカ、特にケニア手話とウガンダ手話について両手話のたどってきた歴史は、西アフリカのたどってきた歴史はかなり異なり、西アフリカはフォスターの学校、東アフリカはケニアのキスムのニャンゴマ (Nyang' oma) ろう学校を中心としたものであった。ただし、タンザニアではスカンジナビア特にフィンランド手話の影響が見られる。
3. 西アフリカとは異なる歴史的経路の結果として、各国の古手話の上に ASL と KSL とが載って混成された手話が基層を共有すると見られるがウガンダとタンザニアではかなり異なる。
4. 日本のような島国とは異なり、人の移動が容易いアフリカ大陸で、手話の伝播の仕方と遠く旧宗主国の手話からの影響は、それぞれの国の手話の形成にどう影響しているのかという点においては、日本-韓国・台湾では、教員の移動が主因、アフリカ大陸では生徒の移動が主因で異なり、加えて旧宗主国・支援ホスト国も単一ではなく、時代と共に変わってきた経緯も反映していると考えられる。

以上のようにウガンダ手話：UgSL, ケニア手話：KSL およびタンザニア手話：TSL の基層の比較研究は複雑であり、東アフリカ地域の各国の手話について、その実態をより明らかにする研究を継続していきたいと考えている。

主な参考文献

亀井伸孝 (2006) 『アフリカのろう者と手話の歴史 - A・J・フォスターの「王国」を尋ねて』, 明石書店。

Lutalo-Kiingi, S and De Clerck, G. A. M..(2015) "33 Ugandan Sign Language". Sign Languages of the World: A Comparative Handbook, edited by Jepsen, J. B., De Clerck, G., Lutalo-Kiingi, S and McGregor, W. B. (2015), Berlin, München, Boston: De Gruyter Mouton, 811-840.

原山浩輔 (2011) 『途上国における手話言語集団としての生計獲得 ケニアのろう者の事例に基づいて』静岡県立大学 国際関係学部 国際関係学科 国際政治経済コース卒業論文。

Miyamoto, R. and Mori, S. (2015) 。 Is Kenyan Sign Language a sister language of ASL? An Analysis of language nativity through comparison between KSL and ASL, 『手話学研究』第 24 巻 (2015 年) 17-30.

森壮也 (2020) 「ウガンダ手話に見られる動詞への「新たなタイプの語彙化」」 『日本アフリカ学会第 57 回大会フォーラム「新しいアフリカ言語研究 2 アフリカの手話言語の諸相」』

森壮也・宮本律子・ニクソン・カキリ (2010) 「ケニア手話の言語構造分析序論 ASL 姉妹言語から見えてくる言語のネイティビティ」 第 36 回日本手話学会大会予稿集。

____ (2011) 「ケニア手話(KSL)文の基本構造 - ASL とは異なる基本語順 - 」 第 37 回日本手話学会大会予稿集

吉田優貴 (2007) 「「一言語・一共同体」を超えて ケニア K プライマリ聾学校の生徒によるコミュニケーションの諸相」 『くにたち人類学研究』 vol. 2 2007, 1-20.

____ (2018) 『いつも躍っている子供たち 聾, 身体, ケニア』 風響社。

____ (2011) 「“まざる”ことば, “うごく”からだ ケニア初等聾学校の子供と周囲の人々の日常のやりとりを事例に」 坂本徳仁・櫻井悟史編 『聴覚障害者情報保障論 コミュニケーションを巡る技術・制度・思想の課題』 (生存学研究センター報告 16), 立命館大学生存学研究センター, 56-102

Tcherneshoff, Kristen Nicle (2019) Na nyingine kutoka nje ya Tanzania: Discussions of Tanzanian Sign Language within a demissionizing context. MA. Thesis. University of Helsinki

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 森 壮也 |
| 2. 発表標題 ウガンダ手話に見られる動詞への新たなタイプの語彙化 |
| 3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会【フォーラム】 新しいアフリカ言語研究2 アフリカ の手話言語の諸相 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 宮本律子 |
| 2. 発表標題 タンザニア手話の社会言語学的状況 |
| 3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会【フォーラム】 新しいアフリカ言語研究2 アフリカ の手話言語の諸相 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 森 壮也 |
| 2. 発表標題 東アフリカの手話の西アフリカの手話との異同 - 特にケニア手話とウガンダ手話に注目して |
| 3. 学会等名 第49回日本手話学会大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 宮本律子 |
| 2. 発表標題 東アフリカの「国家と手話」の関係 - ケニアとタンザニアを比較してー |
| 3. 学会等名 日本貿易振興機構アジア経済研究所研「開発途上国における社会発展と国家と手話の関係をめぐる課題」第5回研究会 |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-----------|---|---|----|
| 研究 分担者 | 森 壮也 (Mori Soya) (20450463) | 独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・新領域研究センター・主任調査研究員 (82512) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|